

第十一結願 四国あるき遍路の旅

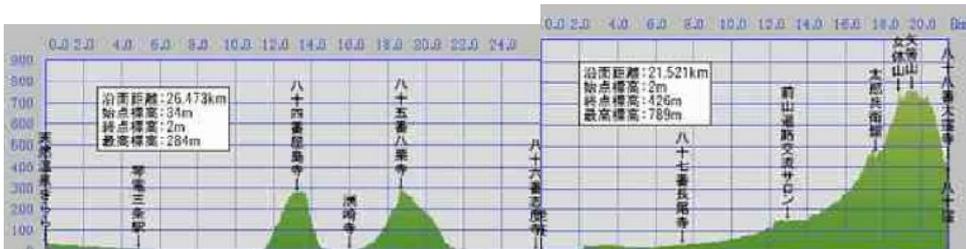
平成十九年二月十七日(土)～十九日(月)
 八十四番屋島寺(高松市)から
 八十八番大窪寺(さぬき市)を経て
 九番法輪寺(徳島県)まで
 総歩行距離 約五十六km
 参加者 十八名

平成十三年三月からはじめた「四国あるき遍路の旅」も、足掛け七年、十二回を数え、ようやく八十八番結願を迎えました。今秋の高野山への御礼まいりと妙心寺への参拝で、四国あるき遍路満願となる予定です。

最初は、四国遍路ブームに合わせて、遍路体験ぐらいのもりで一回だけの企画でしたが、参加者からの「次はいつ行くの。」という声に後押しされて、あるき遍路がはじまりました。十人足らずでスタートした遍路は、桃太郎のおとぎ話のように、回を重ねるごとに参加者を増やして、二十名前後の、あるき遍路としては大所帯になりました。お寺が主催のあるき遍路では、全国的にも類を見ないに違いありません。

第一回から全部参加できたのは、住職以外ではたった一名でした。しかし、途中からの参加者から、「もう一度、一番から回って欲しい。」との声で、来春から第二クールがスタートします。これで、途中から参加の方も、すべて歩くことができると思います。また、これから始めてみたいという方も、第二クールから参加してみてもどうでしょうか。

先のことはあらためてご案内するとして、第十二回の四国あるき遍路のご紹介をさせていただきます。



第12回四国あるき遍路の予定表		平成19年2月17日～19日							
期日	曜日	コース予定					食事・宿泊		
1	2月17日	土	7:55 羽田空港集合 10:15 中央公園下車 11:52 瓦町駅発 15:00 約5.4km	7:55 羽田空港発 10:20 法泉寺着 12:03 湯元駅着 15:30 八栗寺発	JAL631便	9:15 高松空港着 結願記念法話拝聴(横田宗忠師) 「歩歩是道場」(30分ぐらい) 17:00 約6.5km	9:35 高松空港発 13:00 屋島寺発 17:00 栄荘旅館泊	空港リムジン	【歩く距離】約14.7km 屋食はさぬきうどん「とみや」 宿泊:「栄荘旅館」 香川県さぬき市志度573 087-894-0029
2	2月18日	日	8:00 志度寺発 参拝後、「竹屋敷」旅館のバスが迎えに来る。	10:00 約7km 87番長尾寺	10:30 長尾寺発	10:30 約13km(山道含む)	16:00 88番大窪寺	【歩く距離】約20km 宿泊:「竹屋敷」 香川県さぬき市多和竹屋敷123-1 0879-56-2288	
3	2月19日	月	朝食後、旅館のバスが途中まで送ってくれる。 16:07 約3.8km 17:59	14:00 9番法輪寺 16:40 鴨島駅前発 19:00 徳島空港着	14:30 法輪寺発 JR徳島線	12:30 約18.2km 10番切幡寺 17:08 徳島駅着 20:10 JAL1442便	13:00 切幡寺発 15:59 二条中バス停発 17:35 徳島駅前発	【歩く距離】約24km 屋食は道中にて	

■ 氷雨のお出迎え

初日、高松空港から空港リムジンと琴平電鉄を乗り継いで、屋島寺の麓「湯元駅」で下車。電車に乗る頃から、雨が落ち始め、駅での待ち時間で雨支度を整え、湯元からは雨中の遍路となりました。雨も坂も次第にきつくなり、八十四番屋島寺に着くとほとんど土砂降りです。坂道があると、前後の距離が長くなり、最初に着いた人は後続をしばらく待たなければなりません。海外への団体旅行だと、遅れる人を白い目で見たりする人もいますが、あるき遍路にはそんな人はいません。二月の冷たい雨の中を、本堂前で待っていれば、体も冷えてくるのですが、後続の人が見えると、「もう少しだよ。」とか「がんばれ。」とか、自然と励ましのことが出るのです。全員そろったところで、本堂と大師堂それぞれ



■ 願 願 舎

れに般若心経を読経しました。壇ノ浦の古戦場で有名な屋島は、山頂からの眺めも素晴らしい観光地ですが、まだ寒い二月、しかも雨では観光客もほとんどおらず、私たちのお経が雨をついて境内に響き渡るようでした。お参りを済ませ、山上の茶屋に入り、昼ごはんにしました。空腹に食べたいものよりも、石油ストーブの温かさがなによりのごちそうだった気がし





ました。
 屋島寺からは、壇ノ浦に向かって急坂のへんろ道を下ります。雨で滑りそうになるのを必死でこらえながら、麓までたどり着くと、ももやひざはがくがくです。目指す八十五番八栗寺の石が切り出された山が見え、次はあの山を登るのかと、少しだけ尻込みする気持ちになります。
 八栗寺の下に着くと、へんろ道に沿って山上までのケーブルカーがあります。尻込みする気持ちが勝った人はケーブルカーで、元気な人はへんろ道を歩いてと、それぞれに札所を目指しました。

ようやく登りついた八栗寺の参道には、石の鳥居が立っています。参道を進んで本堂前の両側には狛犬が鎮座しているというお寺らしくらぬ札所でした。
 雨は幾分小降りになったものの依然としてやむ気配はな



二 狛犬

く、曇り空とあいまってすでに夕方方の気配さえします。
 こんなとき、一人歩きの遍路は心細くなりますが、たくさんの同行者に心を支えられながら、山を下ることにしました。
 琴平電鉄とJRとの間を通る国道十一号線に出ると、八十六番志度寺までは約2km。納経所が閉まる前にたどり着けるか不安でしたが、今日中にお参りをする事ができ、次の日に余裕を持たせられます。

■ 銭湯のお接待

今日の宿は、「栄荘」という遍路宿。宿に着くと、お疲れでしょうから大きいお風呂がいいでしょうと、近くのお風呂を紹介してくれました。今は全国どこにでも日帰り入浴施設があるし、おそらくそんなところだろうと、





すからということばに従ってそれらしい建物を捜しますが、一向に見つかりません。街中の銭湯なのかもしれないと、みんなで煙突を捜しても見つかりません。突き当たりまで

体を洗って大きな湯船に浸る自分を想像しながら宿を出ました。宿のおかみさんに言われた通り歩くと、道が細くなるではありませんか、こんなところに広い駐車場を備えた日帰り入浴施設があるのだろうかと不安になります。一本目を道を左に行くと右側にありま



行って、右側を見ると、角の堀に、「観光湯」という小さな看板があり、堀の中をのぞくと、「男湯」「女湯」ののれんがゆれていました。私たちが勝手に想像していた日帰り入浴施設は、街中の超レトロな銭湯だったことに今気づかされました。のれんをくぐると、すべてが戦前そのままの下駄箱と番台。番台で入浴料を払おうとすると、「栄荘」にお泊りの方はお代はいりませんとのこと、風呂代は遍路宿のお接待でした。中に入ると、これまた昔のままの脱衣場、洗い場がゆがんで見えるガラス戸、壁のホーローの看板、ところどころタイルがはげた湯船、どれもが学生時代に入った銭湯をはるかにしのぐレトロ感です。皆で洗い場を譲り合い、肌と肌を触れながらの入浴、それでも一日の疲れを取るには十分でした。世の中、秘湯ブーム、もしかしたらこの「観光



湯」も秘湯の仲間入りをするかもしれない。外に出たら、豆腐売りのラッパが聞こえたり、縁台にはステテコで涼むおじいさんで現われそうな気分になせられて、表に出ると、すでに夕刻、急いで宿にもどりました。

■ 結願への最難所

二日目は、いよいよ八十八番大窪寺に向けてひたすらの歩きになります。八十七番長尾寺までは、平坦な道。「栄荘」でお接待にいただいた昼ごはんを食べた「前山おへんろ交流サロン」を過ぎると登りの連続となります。おそらくは、これが一番正當なあるき遍路道と思われれます。ようやく峠に着いたと思っ、上に目をやれば、これから越えていかなければならない女体山がそびえ立ち、峠の先を見る



れ、空中の楼閣にいる錯覚をおこすほどでした。

次は、いよいよ最後の下りです。ここから一気に大窪寺に転げ落ちるような道を下ります。途中の展望台で一休みすると、はるか下に大窪寺の境内がないほどの急な下り坂。途方にくれてもいられず、意を決して下り始めます。下れば登るは自明の理、次の登りは八十八ヶ所最後の登りとなりま



す。岩山を足だけでなく両手も使って、霧で見えない女体山を目指します。頂上の東屋で一休みすると、周りは霧に包ま



ろですが、それ以上に高い段差の坂を下りる不安の方が勝っていたのが正直なところでした。

境内に着くと、先行組が満面の笑みで迎えてくれました。全員そろって、本



見え、先行組が休んでいる姿も小さく見えませんでした。足掛け七年、八十八ヶ所最後の札所がすぐ下にあります。感極まるとこ



堂と大師堂で、般若心経を詠んで、ついに、四国八十八ヶ所結願の時を迎えることができました。宿の迎えのバスの車窓から、さっき登った女体山を見ることができ、さっきの辛さを思い出すとともに、一番から八十八番までのたくさんさんのシーンが走馬灯のように、次から次に浮かんできました。

■ いぎ、お礼参りに

三日目、八十八ヶ所を結願しての朝も、いつもの遍路と変わ



ることはありません。何かご利益があったとか、人格が変わったとか、そんなことは同行の仲間からは感じられません。また朝が来たから、旅支度を整え、新しい一日を歩き始めるだけのこと。八十八番から山越えをして徳島に戻り、十番から一番に向けてのお礼参り遍路を始めました。とはいっても、親切な宿の運転手さんが、徳島県境を越



えて最初の集落の小学校前まで連れてきてくれたのですが、お礼参りは、

八十八ヶ所を踏破した一行の凱旋ではありません。非力な私たちが、怪我や病



気などにくじけず歩かせていただいた、四国の国や



人、時には叱咤し激励してくれた同行の仲間、そして常に見守ってくれていたであろう各札所の仏さんたちとお大師さん。何より、足が痛いとか歩くのが遅いとか言いながらも歩くことができた体を授けてくれた両親、何回も四国に旅立たせてくれた家族や仕事仲間に対しての御礼を込めてのお参りです。最初に歩いたときは、自分のため、そしてお礼参りは私たちを支えてくれた人たちの

ためのお参りといえるでしょう。振り返ると、発心・修行・菩提・涅槃と続いてきた四国あるき遍路ですが、最初の徳島に戻り「報恩感謝」の道場となるのです。



よう謙虚なころにでいたいと願うのです。歩くとそれができそうだから、「歩歩是道場」というのでしよう。

大驚出



そのお礼参りを通して、八十八ヶ所歩いたという自信を、自らの驕りや過信にしない



叶媛三